

社会科小学校 第五年用 村のこども ～私たちの生活（二）～

昭和二十二年九月十五日翻刻発行
昭和二十四年十一月十五日修正翻刻発行
(昭和二十四年十一月十五日文部省検査済)
()

三、さまさまの協力

田うえ 第二はん

ことしもつゆをむかえて田うえをしました。私たちのおとうさんおかあさんは、かさをかぶり汗をながしながら牛をおいおい、一年中たべるお米のつくりはじめに、苦心なさいます。

このころは、もう感心なつばめが日本に帰ってきています。「やあ、帰ってきた。」とみんなで迎えながら、田うえの仕事をします。おとうさんやお兄さんは、牛につけたすきのうしろにつかまりながら、どろ水の中をいったりきたりして、田うえの用意をします。

この用意のできた水田には、なわをはり、おかあさんやおねえさんが苗をはこんで、水田にはいって手早くうえていきます。

おかあさんをまっている赤ちゃんは、田のあぜ道にしいたむしろの上で、ちいさなにいさんやねえさんに子守をしてもらっています。おかあさんがそばにくると、おちちがほしいのか、べそをかいてだかれたがります。するとおかあさんは、どろ手をみせて、「だめだめ。」とくびをふります。赤ちゃんはききわけがない、なきながら、おかあさんいだかれようとします。おかあさんは、あやしながら「ほら、とっと、とっと。」とつばめをゆびさします。赤ちゃんがその方を見ているうちに、おかあさんは、またいそがしそうに田うえの方にいかれます。

昼ごろになると、学校に行っている一、二年のこどもたちが帰ってきます。赤ちゃんはうれしそうに笑い、手をふるようにして迎えるのです。田ではたらいていた人たちも、そこでおべんとうをひらいたり、家に帰ったりしておひるにします。おひるごろは、田んぼも一時しずかになり、おべんとうをたべている人たちの笑い声や、かえるの鳴く声が、はっきりと聞こえてきます。

ひるからは、またみんないっしょうけんめいに働きます。夕方になると、馬や牛もだんだんつかれてきたらしいようすを見せます。それでもみんなはげましあって、暗くなるまでやります。

もうあちことにうえつけのすんだ田が見えてきました。そして、ひるまはえんりよしていた、かえるのなき声がはげしくなってきました。

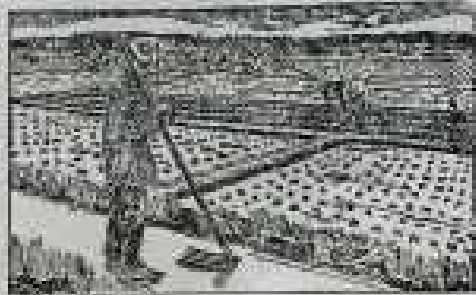
これは、ともえさんの書いた文です。二はんの人たちの田うえのようすを書いた文の中で、ともえさんのがえらばれたのです。

田うえ時 第三はん

田うえの時は、一年中でいちばんいそがしい、しかしまた、それだけに楽しみも多い時です。おとうさんもおかあさんも、おとなりの家の人、手伝いの人、牛も馬も、だれもかれもいそがしいときです。

見わたすかぎりのたんぼはどこも人でいっぱい。年よりも子供も、男も女も、家じゅう総出です。よその家、よその村からも手

かんたんな道具を使って、
田を起す人は、田
間をたがやすには、どんな
道具があるでしょうか。

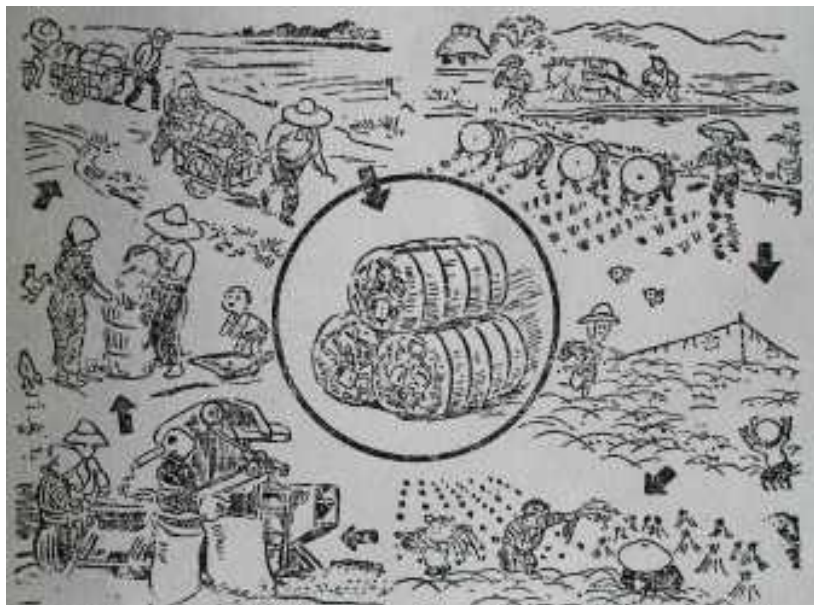


馬の力をかりて土をたがやす人。馬や牛は、そのほか、
どんなふうにして、人々の手
に助けをうけるでしょうか。

トラクターを使って土を
たがやす人。どんな所で使
うのでしょうか。いはいでし
ょう。



29



伝いの人、人がきています。お茶やおひるのときには、あちらでもこちらでもにぎやかな笑い声がします。

ぼくたちは、田うえのときにみんながどんなに助け合っているか、ということを考えたり、しらべたりしました。

一、田を起すには、牛や馬がずいぶん人間

の手助けをします。牛や馬のいない家は、なかなか骨がおれます。牛や馬を借りてやる家もあります。牛や馬もずいぶん働きますから、田うえのときは、特別にごちそうをしたりして、いたわってやります。はなをひっぱらないでも、どんどん田を起こしていく馬や牛を見ると、ほんとうに感心だとおもいます。

二、牛や馬のふくすきや、人のつかうまんがが、仕事の進み具合に関係することゝもたいしたものです。これらの農具は、村のかじ屋や町の工場の人たちがつくってくれたのです。田うえの前には、どの家でも農具をしらべて、ぐあいのよいように手入れしたり、たりないものをととのえたりします。